



W e t l a n d K U S H I R O

自然再生 釧路方式

環境省

釧路から
始まる



サルボ展望台近くの
二本松より朝日を望む

釧路から 始まる



Kushiro Shitsugen

釧路湿原概要

釧路湿原は日本最大の湿原で、面積は約19,000haに及ぶ。タンチョウ、キタサンショウウオ、イトウなどの固有種や希少種を含む多様な野生生物が生息している。1980年に湿地保全を目的としたラムサール条約登録湿地に、1987年には日本で最も新しい国立公園に指定された。

ゆ たかな四季をもち、多くの動植物が息づく日本列島。私たちはこうした自然とともに生きる文化を長い時間をかけて育んできました。しかし、明治以降の近代化、とりわけ戦後の歴史のなかで、経済や便利さを飛躍的に向上させた反面、国土の風景を貧弱にし、数多くの生物を絶滅の危機に追いやってきたことも否めない事実です。

平成14年3月、人間と自然がバランスよく暮らしていくための羅針盤として「新・生物多様性国家戦略」がつくられ、「保全の強化」に加えて「自然の再生」を重要な方向として掲げました。一方的な自然の破壊や収奪といった関わり方を転換し、人間の側からの貢献によって傷ついた生態系を回復していく、その第一歩として自然再生事業を提案しました。そして釧路湿原での取り組みを、全国の先駆けとして位置づけました。

釧路湿原は、人間活動が集積しやすい平野部に位置し、生活や生産活動の場として早くから切り開かれてきましたが、今も、タンチョウをはじめ多様な野生生物を育み、人々に安らぎと恵みをもたらす、日本に残された数少ない水の大地です。一方で、湿原面積の十数倍にも及ぶ流域全体からの土砂流入など、人間活動や開発に伴う様々な影響を受け続け、戦後、特にここ20～30年の間、自然の推移をはるかに超えるスピードで湿原の消失や劣化が進んでいます。

このため、環境省でも、地元NPO、自治体、関係各省などと連携して、平成14年から本格的に釧路湿原の自然再生事業を開始しました。自然再生の取り組みは、ものを造る従来の公共事業とは異なり、人為による悪影響を取り除くことによって、自然が自らの力で回復していくことを手助けしようとするものです。自然と対話しながら、ていねいな手順や方法で進める必要があります。またそれは、30年、50年がかかりで成果の出る息の長い取り組みです。流域に暮らし、農林漁業を営む人たちや様々な立場の人たちといっしょに考え、参加を得ながら、ゆたかな地域づくりに貢献できるよう進めることが重要です。

こうした考え方をはじめ、釧路湿原の保全・再生に向けた目標の決め方や、調査、計画、施工、モニタリングといった一連の事業の進め方、重要なポイントなどを「自然再生釧路方式」としてまとめました。今後、自然再生事業の考え方や進め方を示すモデルとして、さらに議論を深める一方、国内外で参考にさせていただけるよう広く発信していきたいと考えています。



水を蓄え、
生命を育む 湿原。
それは
地球というこの星にしかない
恵みだ。

湿原を とりまく状況



湿原のハンノキ林

宅地開発・農地造成をはじめ、社会経済活動の急激な拡大の影響が湿原に及び、過去50年間で湿原面積は約2割消失、動植物相も大きく変化しました。その一方で、湿原の価値を見直そうとの動きも見られるようになっていきます。

湿原をはじめとする地域の自然は、 人々に多くの恵みをもたらしてきた

湿原の流域に位置する5市町村（釧路市、釧路町、標茶町^{しべちや}、弟子屈町^{てしかが}、鶴居村^{つるい}）の人口は約24万人、多くは明治以降の入植者の子孫やその後新しく移り住んできた人々たちです。地域経済を支えてきた主要産業は、畜産業、漁業、紙・パルプ、鉱業であることに見られるとおり、釧路川流域一帯の自然資源に依存し、これを開発・利用しながら発展してきた歴史があります。

また、湿原は、その特異な景観や水源涵

養、水質浄化、洪水調節の働きなど、さまざまな恵みを地域にもたらしてきました。

人為的要因により 釧路湿原が大きく変化

戦後、釧路市周辺では工業立地などにより人口が急増、また流域の基幹産業である農業では1960年以降、酪農振興への取り組みが本格化します。こうした社会情勢の変化のなかで、湿原とその周辺部において、宅地や農地の造成、河川直線化や排水路整備が進むとともに、人工林が拡大、荒廃地も増えました。その結果、湿原面積が戦後50年間で全体の約2割減少したことに加え、湿原への土砂や栄養塩類の流入等に伴い、湿原域内のハンノキ林の近年の加速的な拡大など湿原植生の著しい変化が見られ、河川、湖沼や森林と一体となった湿原生態系の劣化が進んできました。

こうした湿原生態系の衰退は、釧路湿原を特徴づけるタンチョウやキタサンショウウオ、イトウをはじめとする野生動植物の生息生育環境の悪化、湿原景観の改変を意味するとともに、洪水調節機能など湿原がもつさまざまな機能の低下にもつながっています。

湿原の価値を見直す動きも

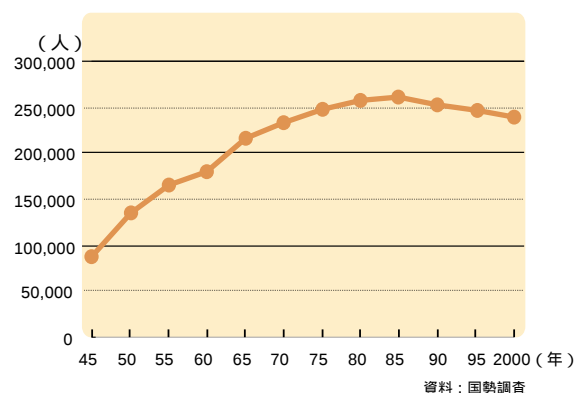
釧路地域ではかつて、湿原は生産性を上げにくく不毛な地であるとされ、様々な開発や土地利用の影響を一方的に受けてきました。また周辺に住む多くの人々にとって、湿原とのふれあいやかかわりはどちらかと言うと希薄で、縁遠い関係にありました。

しかし、開発の圧力が高まった1970年頃から、湿原の価値を見直す動きも現れるようになり、ラムサール条約登録湿地としての指定、国立公園指定を経て、世界的にも釧路湿原の価値が認められるようになりました。

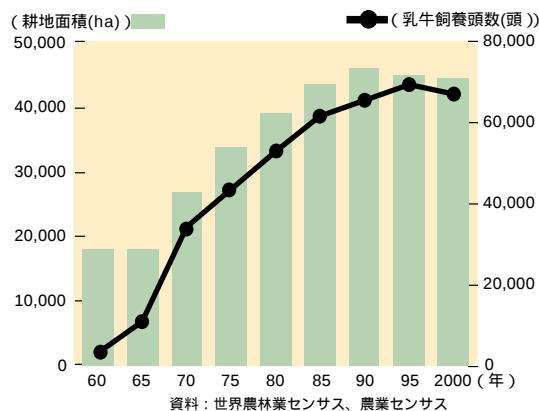


入植当時の状況 明治以降、未開の原野を求めて多くの開拓者がやって来た。湿原とその周辺の森は、入植した人々に苦闘を強いるものだったが、同時に、多様な生きものを育てるゆりかごであり、限りない恵みを与えてくれる源でもあった。（鳥取村開村40年記念 大正13年 所蔵：鳥取神社）

流域5市町村の人口の推移

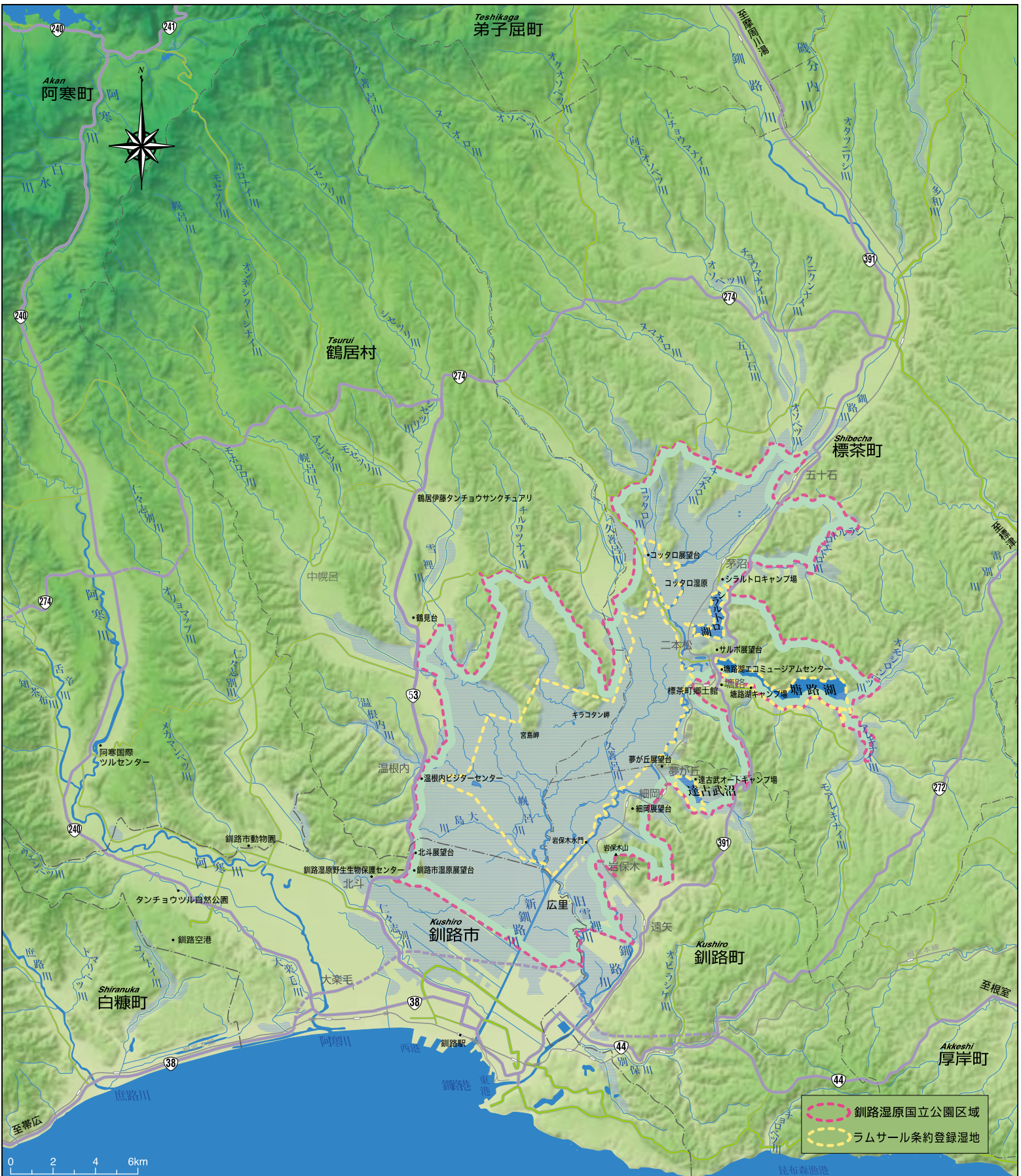


耕地面積及び乳牛飼養頭数の推移（5市町村計）



牛の糞尿量は人間の約50倍と推定されており、流域5市町村の牛の頭数約6万頭に人間に換算すると、約300万人に相当することになる。

湿原の成り立ち 今から約6000年前には海であった釧路湿原。その後、海退が進み、湿原として姿を現しはじめてから約3000年、周辺の台地・丘陵地から水を集めつつ、湿原内を網の目のように流れる川的作用によってゆるやかに変化を続けてきた。湿原の土台である泥炭層は、ヨシやスゲなどの植物が分解しないまま1年に約1mmの厚さで堆積し、長い年月をかけてつくられてきた。



世界とつながる釧路湿原 釧路湿原は、オーストラリア、東アジア、シベリアなど世界各地から水鳥が飛来する重要な湿地である。これだけの規模をもつ湿原が20万人都市と隣接してあること自体が世界でもまれであり、平成5年には釧路でラムサール条約締約国会議が開かれている。

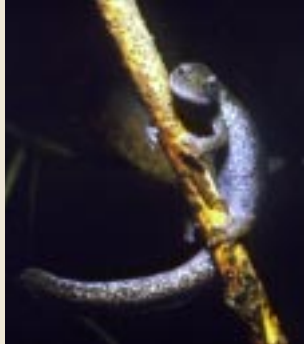
釧路湿原を代表する生きもの

PHOTO: 林田恒夫



タンチョウ

一時は絶滅が伝えられていたが、大正末期に鶴居村キラコタン岬付近で10数羽を発見。以後、地元を中心とする保護活動により増え続け、平成15年1月には約900羽が確認されている。個体数が増加する一方で良好な湿原域は減少しているため、過密化による生息環境の悪化が懸念されている。



キタサンショウウオ

氷河時代の遺存種といわれ、国内では釧路湿原にのみ生息。湿原縁辺部に生息確認地が多いが、農地開発や宅地開発が進むことにより生息域が狭まり激減、いま積極的な保護が強く望まれている。



キタサンショウウオの卵のう

イトウ

日本最大の淡水魚で幼の魚といわれる。湿原内を流れる蛇行河川や湖沼などに生息。夏期は中・上流域で過ごし下流域で越冬するものが多いという。乱獲や、河川の直線化などによる生息環境の悪化によって、生息・繁殖の確認情報も激減、保護が強く望まれる。

PHOTO: 中林成広



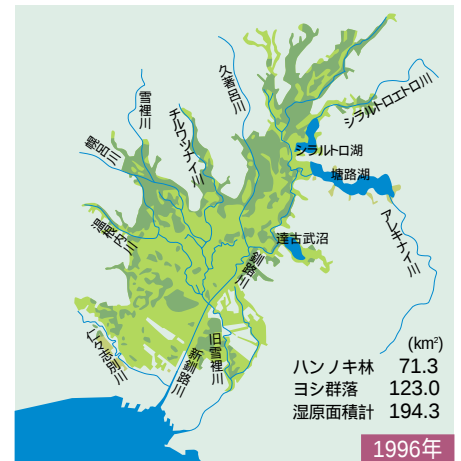
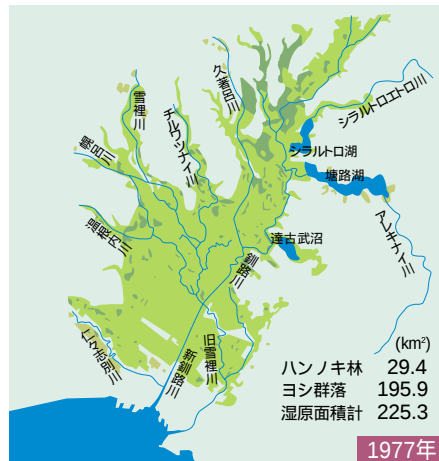
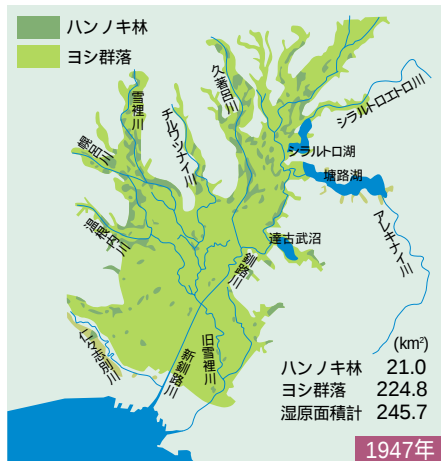
人と湿原との新しいかかわりを求めて

近年、炭鉱の閉山、漁業生産の不振など主要産業は停滞し、人口も減少傾向にあります。これらのことから、湿原が地域に残された資源として、注目を集めるようになってきました。観光についても量的には伸び悩みの傾向にある反面で、エコツアー、修学旅行における環境教育の場としての利用など、湿原の新たな利用形態が出現しています。

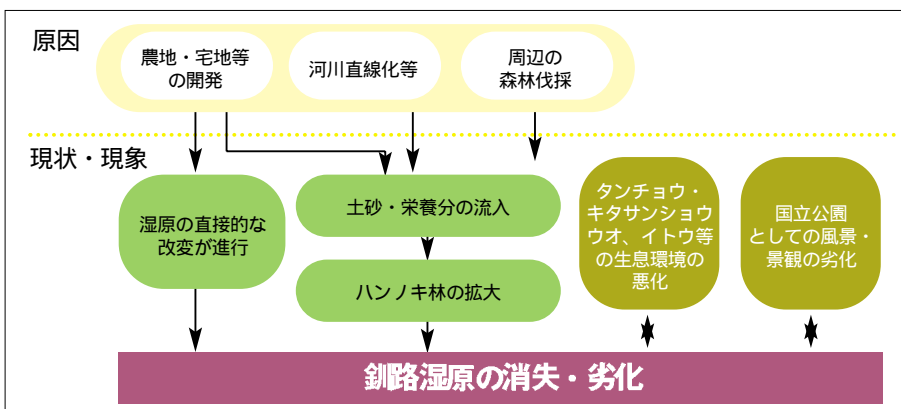
どちらかという恵みを受け取る一方で生態系の衰退を招いてきた、これまでの湿原とのかかわり方を見直し、湿原の消失・劣化傾向に歯止めをかけて回復に転じる、そして湿原とともに生きる、釧路地域ならではの豊かな暮らしを実現していくべき時期を迎えています。

湿原面積の変遷図

過去の航空写真解析によれば、湿原面積は戦後50年間で約2割減少。湿原域内のハンノキ林面積は戦後、1977年までの30年間で4割増、その後1996年までの20年間で2.4倍と加速度的に増加。久著呂川、雪裡川など河川の湿原流入部を中心に拡大。(国土交通省資料より作成)

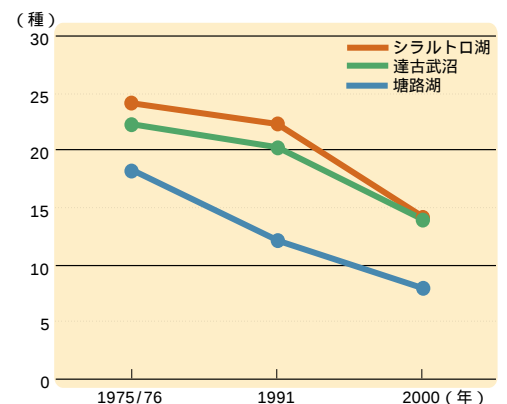


釧路湿原が消失・劣化した原因と現状



中村らの観測(1995)によれば、流域の改変が進んだ久著呂川では、一回の洪水により湿原内に運ばれた浮遊砂量は1,120トン、年間の総量は7,400トンと推定された。

3湖沼における水生植物の確認種数



この25年で、各湖沼とも水生植物の確認種数は著しく減少、その主な要因として湖の富栄養化による透明度の悪化が指摘されている。(高村典子氏ほかの資料より作成)